

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第152号・平成14年5月1日

年表で読む

古平の歴史

《58》

海運の移り変り

■古平と余市間航路

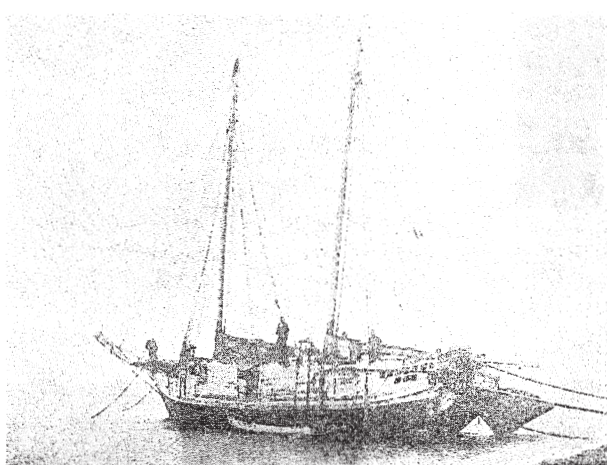
余市までの山道は人馬が通れる程度の道しかなく、荷物を積んだ馬車などは通ることは出来なかった。海産物などの輸送や急用のときは、アイヌの人が漕いだ三半船(さんぱんせん)にしん漁などに使われた船が使われていました。

今からざつと一五〇年程前の記録にも、「古平から余市に向かう帆船は、まず丸山岬沖に船を進め、沖の風を利用して余市に向かうのが早かった。積丹、美国から余市に向かう船は、古平へは寄港しなかった。」とあります。

また、これより約五〇年前に書かれた紀行文の中にも、

「十七日、朝小雨、昼過ぎに出帆する。シマモイノサキ(積丹町島武意)を過ぎ、ヒクニ(美国)十軒、アトマイ(厚舌)二十軒、アトマイの岬からヒロイシ(群来町?)、マルヤマノサキから古平湾、ウタスツ数軒、ラルマキ数軒、ユウナイ(湯内)豊浜町)七軒、潤あり、シュマリナイ(島泊町)、ここから五、六丁(二下)約一九〇メートルのところに蠟燭岩(ろうそくいわ)あり、デタルビラ(出足平)白岩町)小屋あり、シリバノサキ、大岩山なり、シャコタン岳積雪あり、ヤマシタ出崎を廻って、ヨイチの潤に入る、人家数十軒あり、泊る。」

本陣の浜に接岸した
改良型弁財船(べいせん)＝通称・アイノコ型弁財船



が往復していたようです。

■古平と余市間の不定期便

明治十五年頃、沢江村の保木嘉七が※1川崎船で不定期に運航していました。川崎船に帆を上げ、二丁ろ(艫・櫓)で往復していましたが、明治四五年頃、やや大型の川崎船に発動機を取り付けて運航していたといえます。

これより前の明治三年頃、余市郡湯内(豊浜町)の小黒浜蔵が古余丸(九・九ト)を買い

入れ、鯨漁のときに※2梓引きをしていましたが、漁期が終ると古平郡の廻船業小町泰治郎と共同で、古平と余市間の不定期船の運行をしていました。

また、小町泰治郎は同三五年頃回漕店も経営し、三港丸で古平と余市間の定期船を運航していたといわれています。

変わったところでは、明治の末頃沢江村の船大工木村桑蔵が、鯨漁に使う保津船にスクリユーを取り付け、それを人力で回転させることを試みましたがろやかい(權)よりも能率が悪く、せつかくの考案もうまくいかず、その後はこれを試みようとする者は誰もいなかったそうです。

■小樽と函館間

定期運航

明治一三年頃、すでに小樽と函館間には定期船が運航していて、往復の途中古平にも寄港していた(次ページへ)

㊦ (前ページから続く)

ました。それまでは本州方面と直接、移出や移入をしていました。この年、札幌を經由して小樽手宮駅間に鉄道が開通したこと。荷物は小樽を經由して運ばれることが多くなりました。明治二三年には小樽港は特別輸出港に指定され、各地から物資が集まるようになり、その後小樽港は大きく発展することになります。

■古平・小樽間不定期航路

明治三八年、小樽・函館間に鉄道が開通し小樽は商業の中心地となりました。古平からの物資もほとんどが小樽に依存するようになり、これらを運搬するために不定期船が運航されましたが、初期の頃はほとんどが帆船でした。

川崎船の船べりを高くし、乗組員は三人くらいで、風の無いときにはろを押して航海していましたが、大型の船になると二本マストで、後には焼玉発動機八馬力程度の機械を取り付けるようになりました。船も一〇トン程度で、その後、船はやや大型になりましたが、この航路がな

くなるまで、運賃積みとされていた時代にも、動力は発動機に替わってもこの船型はほとんど変わりませんでした。

■小樽・古平・積丹航路

海産物の産出の多かった古平や美国方面には、それぞれの回漕店から定期船が運航されていました。

―明治三九年の出帆広告―

▽西谷回漕店

大勢丸 古平―美国―積丹

隔日 午前八時出帆

▽塩田・清水回漕店

積丹丸 古平―美国―入舸

―来岸―余別

隔日 午前八時出帆

▽貴志回漕店

古余丸 湯内―古平―美国

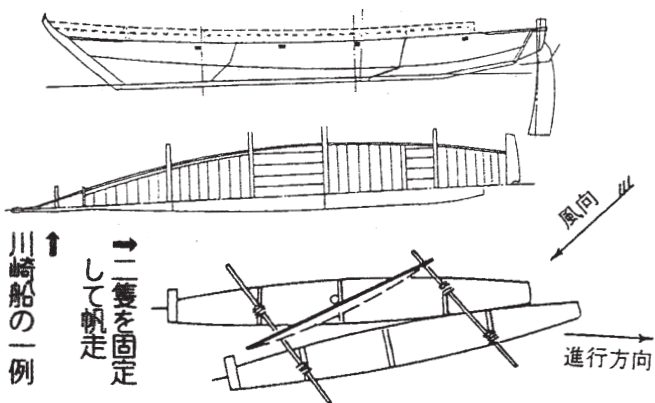
毎日 午後二時出帆

▽安藤回漕店

美国丸 美国―古平

毎日 午前八時

※1・川崎船Ⅱ簡単に説明できない和船の型ですが、それまでの和船に比べて航行性能が優れていると言われています。名前の『川崎』というのは、町村合併して新潟県出雲崎町になりましたがここで作られ、川崎衆と



川崎船の一例

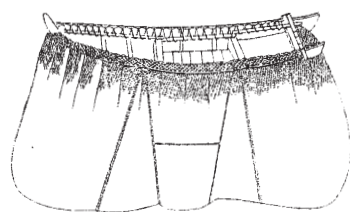
いわれるこの土地の人たちが秋田県金浦(さくら)辺りのタラ漁に出かけ、この船の優秀なことが認められたようです。戦前には北洋のカニやサケ・マス漁に、古平でも明治の中ごろのタラ漁や、戦前まではスケソウやカレイ漁、戦後の鯨漁にも使われていました。東北から北海道にかけて改良されながら使われてきましたが、古平では『カワサキ』と呼んでいました。

二隻の川崎船を固定すると安全性や耐波性、帆走性能が格段に向上して、時化のときや遠くまで行くときには好都合だったといえます。

※2・枠引きⅡ網に入った鯨を船から吊り下げた大きな袋状の網に入れ、それを浜まで運ぶのですが、距離が遠かったり、海が荒れると大変でした。そこで発動機船が浜まで引いて行くのですが、それを枠引きと言っています。

袋状の網を枠、それを吊り下げた船を枠船と言いますが、これはもともと、角材で組んだ枠に袋状の網を吊り下げたことによります。

これは鯨船の下に吊り下げられた状態の枠船



な進歩で、群来村の秋元金四郎が考案し、それを後に同じ群来村の白岩八右衛門が改良したものです。

郷愁にさそわれて

大 沢 文 子

大寒も過ぎ春待つ季節になると、豊漁だった助宗が、軒下にかラカと音をたて干されていく。綿糸で吊るされた助宗に漁網を掛けるのは、鳥からの被害を防ぐための工夫だという。浜ならではの風景であろう。

年明くる浜の人家の軒下に綿糸に吊られし干魚の鳴る。また、海沿いの道のそここに細い棒を渡した干し場があり、採り立ての若布が掛けられている。汐風に揺れる若布はブーンと磯の香を放つ。

「ああ、いいなア……」
私はいつも遠く沖に向かい、もろ手を広げ磯の香に身をまかす。採りたての若布はおいしく。サツと湯をとおし浅緑色の酢の物、さしみ、味噌汁の実と考える間もなく膳にのる。海の町に住む者の特権であろう。

× × ×
例年になく暖かな日和が続

き、いち早く庭面を染めるサフランの花に、ふと、いつか遠き日の浜昼顔を思い出す。海際のだ端に思うまま蔓を延ばし咲き誇っていた浜昼顔の花を……山城さんの玄関近くまで悠々と蔓を延ばし、思うまま薄桃色の花を咲かせていた。摘んで花瓶にと思うこともあったが、そのままの風景を眺めるのも楽しく手折ることも出来なかった。

だがあれから何年経ったろうか。舗装の工事が進むにつれ、現場には浜昼顔の緑葉の一葉も見当たらなくなっていた。

海沿いのわが家の横も舗装され浜昼顔の咲くこともなし

その頃から海岸線は年々侵食され、町の磯浜も一年ごとにせばめられ

離岸堤や消波ブロック等の工事が盛んになっていった。だが、何年か前まではまだまだ磯浜も多くあり、遊び場所や憩いの場所として子供らに珍重されていたのである。

わが家ではその頃、若い衆のために漬物を幾樽も着けていた。春になると空になった漬け樽を波打ち際まで持ってゆき、わら縄を丸めて作ったたわしで時間をかけて洗った。やつと洗

昭和52年・すけそ漁で賑った古平漁港
△服部昇司遺作品から▽



い終えたときには海水の冷たさに指がかじかんでつらかった。ときに思い出すこともある。

その頃であろうか。わが家の前側に大林道路のプレハブ住宅が高々と建った。沢山の男性や賄い婦の方が毎日忙しく出入りがあり、新鮮な気持ちでお付き合いができた。

ときには浜辺で酒盛りが始まり、夜遅くまで歌声、手拍子が波音の間に聞こえ楽しかった。もちろん夫も誘われ、いそいそとその仲間に入り楽しそうな笑顔に、つい私までうれしくなったものである。

雨止みし飯場の脇の草むらに濡れてやさしき月見草の花

ふと宵おそく、本棚からとり出した分厚い日記帳。懐かしく、時かけてペーを繰りながら思い出の記を書いている。

春たてば海沿ひ道の断崖にかたまりて咲くカタクリの花

世の移り変わりを知るすべもなきカタクリの花。今でもあの断崖の下にひっそりと、薄紫色の花を咲きつづけているのであろうか。

へ大正十九年へ

12/3 三、四年生の保護者
会があり学校へ行く。算術の授
業を見たが、一教室に七〇余名
で、先生も子どももなかなかゆ
るくない。二時間目は読方(国
語)で蛙の話だった。一〇時か
ら裁縫室で校長の話があった。
父兄も沢山集まっていた。一時
頃帰る。

12/8 朝から雪が降り出し
少しも止まぬ。午後からは大吹
雪になり一尺も積もる。いよい
よ今年の根雪になったようだ。
寒さも三〇度F(マイナス一
度C)でまさに寒中のようなだ。

12/9 起床七時、寒さが厳
しい。寒暖計は二七度F(マイ
ス七・〇C)まで下がる。昨夜か
らの雪、また一尺も積もった。店
の方はカレ網がぼつぼつ出る。
綿糸類、先安の見込みか売れ行
きがはかばかしくない。明年一
月頃には良くなるだろう。

12/10 今日雪、一昨日来
の時化も今日になってようやく
なぎる。この時期には珍しい上

なぎだ。五時頃、古英丸が小樽へ
出発するというので、荷物を積
み込む。

12/12 朝夕は寒さが厳し
い。このところカレ漁がいいの
で、網の売れ行きも良い。積丹西
河から刺網の客が来て一〇〇間
程も買って行ったが、見切った
値で売った。入船町大謀へ行き
帰り魚市場へ寄ったがカレ、テ
ックイ、サメその他、多くの魚

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【53】

が出ている。

12/13 雪も随分降り寒さも
厳しい。寒暖計は二七度Fまで
下がっている。午前、長尾床屋で
散髪をする。

12/14 寒さが相変わらず厳
しいが、カレ漁がいいので道具
や網類が出る。夜、里清水の兄が
明日入営するので送別会に招待
される。一四、五名が集まってい
て、酒肴の馳走があり八時頃帰
る。

12/15 里清水さんが入営す
るので見送りに行く。九時発の
末広丸で出発した。大謀へ掛け
取りに行く。毛や〇も来てい
る。本年は不漁で欠損になった
から一割値引きを頼むという。
いろいろと交渉をしたが致し方
なく売上高一、一六〇円に対し
て一〇〇円値引きしたが仕方な
い。五八〇円を受け取って帰る。
今後こんなことでは困る。注意

せねばならぬ。

12/16 寒さが厳しい。カレ
網は出たが昼頃から吹雪いてき
たので皆戻った。カレ網は去年
より良いので近頃は道具や網類
がよく出る。物価暴騰で米一俵
一二円五〇銭、もち米一四円、鯨
粕も二二〇〇円ぐらい、その割
りに他の物価は下がっていない
ようだ。

12/17 今朝は珍しく快晴、
そして暖気だ。店も忙しくなっ

た。年貢のことで畑町へ行く。三
時頃帰ったが夕暮れのような空
だ。

12/18 今日快晴、三三度
Fぐらいで海も上ナギだ。五月
ころ胴鯨が二、八〇〇円ぐら
いだったものが六月中旬、急に暴
落、一、六〇〇円ぐらいになり、
八月になったらまた二、五〇〇
円から二、六〇〇円に戻ったと
思ったら、以後また暴落して二
〇〇〇円ぐらい。海産商の打撃
は甚だしく、漁業家もこれでは
春の大漁もさっぱりだ。昨年は
海産商も成金で景気が良かった
が、今年は実に苦しいことだろ
う。今年もカレ網は大漁、マガレ
やテックイが殊に良かった。戸
沢では五、六〇〇貫も獲ったと
のこと。一般に大漁でこちらは
景気が良い。

12/19 カレ網が大漁で店の
方も忙しい。浜も景気が良い。夕
方、本陣の浜に行つて見たが大
漁旗を立てて元気が良い。戸沢
では今日も六〇〇貫から獲った
といい、送るのに荷造りで忙し
いようだ。ヤマセが吹いて来て
時化模様になってきた。

12/20 雪三三度F、昨日から空模様もはつきりせず、カレ網も出漁を見合わせた。網ロープなど二、〇〇〇円程の荷物が着いた。早速四〇〇円程が売れたが、漁さえあれば売れ行きも良い。浜では漁のあることが第一だ。

12/22 今晩から暴風雪に変わり、ガラス戸が雪で真っ白になっている。熊さんは雪かきで忙しい。今日は時化でカレ網も休み。カレ網五千余間の手持ちがあったが全部出てしまった。

12/23 今日も吹雪が続いている。こたつに入っている顔や手が冷たい。

12/24 年末になったので帳簿調べをする。荒れ模様であったがカレ網は皆出た。午後三時頃ポツポツ帰って来た。本陣の浜へ行って見たがカレ網は大漁。戸沢では今日も五〇〇貫以上も獲った。マガレが多いのでひとナギで二〇〇円ぐらい、今日までで一、六〇〇、一、七〇〇円も水揚げがあったという。近年に稀なカレ網の大漁で、この分だと明年もカレ網の売れ行き

がいいだろう。

へ大正十一年へ

1/11 珍しい暖気でつららも融けている。このごろないことだ。カレ網は今日は船祝いので休む。ひとナギで二〇〇、五〇〇円だという。カレ網大漁で成金だ。一七掛けの網は二倍獲れるというので大好評だ。どこも来年は一七掛けを入れると意気込んで入る。戸沢、大谷は道具も良かったようだが最高の水揚げだという。鯨場よりよかつたとのこと。カレ網成金が出たというので町中の評判だ。我々にも間接的によいことだ。今秋はずい分と道具類の売れ行きもよ

いだろう。仕入先、売り先はぬかりなく交渉せねばならぬ。

1/12 昨夜からの吹雪は甚だしい。昨年は売れ行きが予想外に不振だったので、今年は一三万間は売りたい。熊さんは新通帳の配布に行く。私は帳簿調べをする。夜、面白倶楽部と講談倶楽部の新年号を読む。

1/13 夜、米田さん宅で部落会の役員会がある。いろいろ

な問題が出たが、まず除雪励行のことについて話し合った。

1/14 一〇時頃久しぶりに新地方面へ行く。銀行で為替を組む。佐渡から安い網の案内が来た。古平への荷物もあるのですぐに送るとのこと。

1/15 雪で時化。カレ網も休み。雪が多く出面を二人頼んで雪引きをする。美国から改良糸を買いに来た。刺網がポツポツ出る。昨年よりは出るだろう。昨年は多く仕入れたが、値段が暴落してどこも失敗した。二月頃になれば客が増えるので少し様子を見ることにした。

1/19 快晴で近來にない暖気。今日も出面を頼んで雪引きをやる。雪も部落会の申し合わせで道路もよくなった。店も刺網がポツポツ出る。

1/25 また寒さが厳しくなってきた。刺網の方も忙しくなってきた。セの店員が来たのでいろいろ様子を聞く。網一萬間注文する。

1/26 厳寒期となった、こんな寒さは今年になって初めてだ。こたつに入っても顔や手が

冷たい。寒暖計は二〇度F(マイナス六度)

1/30 寒い朝で歩くと雪がキュッキュッと鳴る。上ナギでカレ網、タラ釣り共に出る。丸山町と美国町からの客で、刺網千間近く出る。夜、禪源寺和尚さんが来て読経する。白玉とさくらご飯を作る。

2/7 朝のうち風が強く吹雪だったが、一〇時頃からだんだん晴れてきて、カレ網も遅くなつて出た。刺網時期となり店も忙しくなってきた。この頃は毎日千間ぐらい出る。アバ縄の売れ行きもよい。古英丸で網が着いた。夜、困で火防組合の役員会がある。

2/8 天気快晴 九時頃積丹日司から刺網五〇〇間を買い客が来た。五里もある所から歩いて来たのだ、大分勉強した。夜、ピヤホールで火防組合役員の慰労会があり、二〇余名が出席する。席上、永年勤続の三浦小島、西下さんの三人の表彰があった。九時頃帰る。今日は旧正月の元旦なので、家ではあん餅を作った。(以下次号)

古辛いろはうた

お 大晦日平和の鐘が鳴り響き、

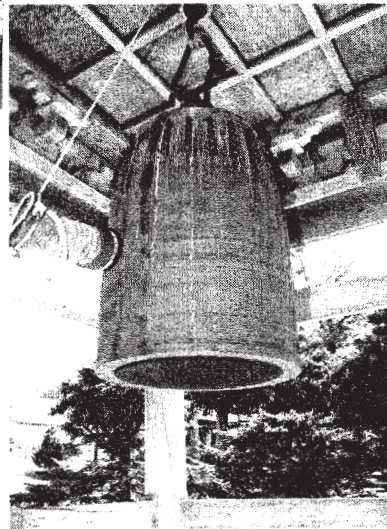
桜に若葉、地上が萌えるこの季節に大晦日はちよつと合います。『平和の鐘』の響きに耳をかたむけてみましょう。

大正四年、種田富太郎は禅源寺に鐘楼と梵鐘を寄贈し、寺の催事やときには町の行事に、また岳轉和尚の主幸した祝聖会の集まりなどに鐘をついて、その莊重な澄んだ音色を響かせていました。

そして昭和十七年、太平洋戦争も次第に激しさを増し、軍需物資の不足する中で金属回収令が出され、寺院の梵鐘や仏具の強制供出を命じられました。

檀家も集つて、岳轉和尚の読経があり供出に応じましたが、せつかく供出したはずの梵鐘もしばらくは荷揚場に放置されたままになっていて、それを見た岳轉和尚は「ああ、もったいない、もったいない。」

い、もったいない。これでは檀家の人たちに申し訳ない」と言っていたそうです。その後の行方は全



→《平和の鐘》
↑大正四年建立の禅源寺鐘楼

災者も多かったことにも配慮し、一般からの浄財を集めることは遠慮し、まず信徒の寒修行によつて基金を集めたいという岳轉和尚の発案で、翌年の一月から二月にかけ、東部と西部に分けて十日間程の寒修行を行うことになりました。

く不明ですが、やがて戦後の昭和二年、総代会で梵鐘を铸造することが話し合われ、実現へ向けての要望が盛り上がってききました。問題は資金でした。が、前年の西部方面の大火で被

昭和二年一月二日、東部方面から寒修行が始まり、この年は二月三日まで、途中休みをとつて一二日間行われ、一四、三二六円一〇銭の募金と米七升五合の寄進がありました。

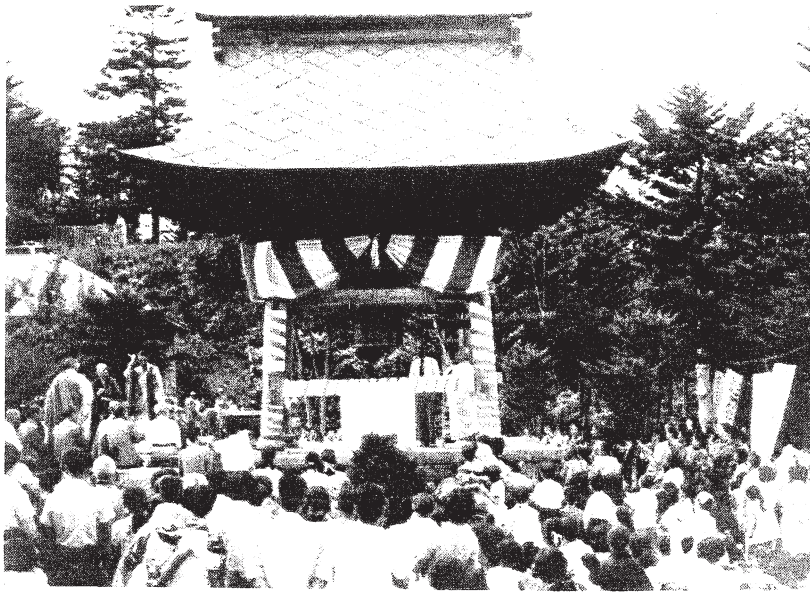
その後も毎年寒修行は続けられ、記録では昭和二八年までで六〇、五三六円八〇銭の基金が集まりました。

当時、寒修行に参加していたのは次の人たちでした。

秋田岳轉・北浜嘉雄・藤田秀雄
橋本善二・名達博・山田常次郎
水見八郎・津田節彦・梅野清太郎
三浦銀治・伊藤梅吉・西島留太郎
品田孝・高野名幸作・岩井富之助
岩井良介・高野常雄・佐々木由松
飯原光三・鶴谷石太郎・末政市松
秋田豊三・秋田良英
大滝シズ・小平トキ・小野寺アキ
小野寺スエ・小野チヨ・中野ハツ
小野寺トヨ・鶴合ハツ・上野イソ
上野ソメ・工藤ハナ・野藤トヨ
荒関スエ・佐藤リネ・若山ナミ
酒井チヨ・木村サクラ・加藤ミヨ
中島チヨ・杉山キン・内山トシ
渡辺ミツ・関川スワ・原田イソ
秋田ハル

昭和三十一年、前の梵鐘を製作した京都市・鐘声堂にほぼ同じ大きさの外径二尺六寸、約一五〇貫の梵鐘の見積りをとったところ総額約五〇万円でした。

禅源寺《平和の鐘》撞初式



寒修行での養銭を基金とし、不足分をどのようにして調達するか協議されました。二年前に、京都六角堂の梵鐘製造に当たっては個人が銅塔婆（どうぼ

Ⅱ銅板の小さい塔婆）

を買うと、それが資金となり、銅塔婆は溶解して梵鐘の

材料とし、完成した梵鐘の内部に喜捨をした人の氏名を

刻字する、という案の助言もありました。

しかし、その頃からスケソの盛漁時代にも恵まれたことから、檀家を中心

淨財の喜捨を受け、念願の設置にこぎ着けたいというのが結論でした。一方、鐘声堂からは「朝鮮戦争の影響もあり、近頃は銅の相場の変動が激しいので、見積書の期限内にご注文下さい」という案内もありました。

その後、資金については檀家や有志からの喜捨が相次いだことから、昭和三十一年、予算四二万円、四月中に完成ということで契約しました。

その間、岳轉和尚と鐘声堂との間では一〇数回にわたって文書の往復があり、製造にかける熱意は並々ならぬものがありました。

銅地金の相場の変動などもあり、製造は六月になりましたが、鐘声堂からの連絡では、

「――梵鐘製造も遅延いたしました。――」梵鐘製造も遅延いたしました。――

したが、いよいよ来る一二日午後一時から製造いたすことに決定しましたので、何とぞご了承の上、当日は同時刻にご仏前に成就ご祈願下さいますようお願いいたします。（略）

て一〇余年ぶりに復活し、昭和三十三年八月二〇日、盛大な撞初式が行われました。

鐘楼だけが空しく建っているのは寂しい限りで、祖先伝来の信仰と梵鐘の音を聞いて生活の中に菩提心を起こし、永遠の平和を願う気持ちから、岳轉和尚自らがこれを『平和の鐘』と命名しました。梵鐘には次のような銘文が刻されています。

南無大悲観世音

聞聲悟道 見色明心

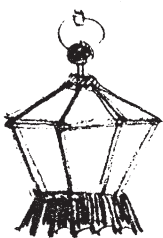
靈鑑不昧 超古越今

平和之鐘

また、平和の鐘再建の日に供えてと題して、短歌一首を詠んでいます。

ひたすらに願いをかけし
この鐘の音聞く今日の
我れのよろこび

五世岳轉書



北海道・樺太・千島を探險

最上徳内

蝦夷草紙

(19)

を読んでみましょう

エトロフ島のこと

エトロフ島(択捉島)は国後島から渡るが、島の西南側の大変けわしいがけの下に船の入るところがあり、国後に渡る船がここで日和を見ている。十二里(四七キロメートル)ほど北にモヨリという所があるが、ここは蝦夷の島である。この浜には古い錨(いかり)が三個あつて、六十貫目から八十貫目(三百キ)ほどもある。

松前の記録によると、宝暦六年(一七八六年)二月七日に浦賀の港を出航した船が暴風に遭い、五月十七日モヨロに來たがこの浜で遭難したという。今から三年前のことである。

ある。

それ以来、この島に和人が來たことがないので、和人を知らないアイヌ人が多い。われわれが行くということをもつて知らせたので、村から村へ連絡がいき、皆が珍しいものを見たさに集まっていた。女や子供にいたるまで皆砂浜に出迎え、うやうやしく礼をして並んでいる。

この辺にはシヤシという昆布がある。ワカメのような葉があるがうすく、絵に描いた鳳凰の尾のようである。幅は一尺から二尺ばかり、茎は細い竹のようで中に穴があいていて、短いものは二三丈(六く九尺)から長いものは二十間(三十六尺)もある。実に

奇怪な海藻である。これからまた北に向かうとアツサノボリ(梓山)という高山があるが、ここから北へおよそ島の中ほどまで行くとエトロフワタラという岩があることから、この島をエトロフというのだ。

この島に、昔、オキクルミとシヤマイクルという二人の勇敢な武人がいたが、その者の太刀の柄に付けていた緒の形に似ていて、この武人は義経、弁慶の兩人だという説があるが詳しくは知らない。

さらに北にシヤナアというところがあり、そこには大きな川がある。水は満々として勢いが強く、山はよほど奥が深いと思われる。ここはワシの羽の産出が一番で、しかも品質が最高である。

シヤナアよりも北に行くとシヨツチキヤという所があるが、ここにはアイヌの人たちが食べ物にしているという珍しい土がある。色が白く柔ら

かく、まるで餅のようである。その土に水を注いで、砂を除いてから煮て食べるのであるが、くせがなく、麦粉で作ったのりのようで、アイヌの人たちはことのほか喜んで食べている。

これより北、島の西北部のシヤルシヤムという所に、松前の人たちが赤人と呼ぶフロシヤ国(現在のロシア)の人が滞在していたが、この人たちは卒塔婆(そとうば)のようなものに自分の国の文字を書き、屋外に立ててこれを朝夕拝んでいる。

この地にイバヌシカというアイヌ人がいて、その赤人から言語を習つて通辞(通訳)になり、やがてその赤人からホオナンセという名前をつけてもらった。

このシヤルシヤムからさらに北にヒンネベツというところがあり、ここに高さ数十丈の(一五〇—一八〇メートル程)滝がある。岩山の上から

真つすぐ海に落ちていて、その辺を通るときに滝を見上げると細い雨が降るように水がかかり、近寄ると雷電のように滝の音が響く。ウルップ島から帰るときに、沖からこの滝を見たが蝦夷地第一の滝だという。

ここまでは海上も穏やかであつたが、ここから東側に廻ると荒海で波も高く、潮も早い。焼山を廻つて、一日の海路でトウシルル（戸知）というところに行くと、古い錨が一丁置いてあつた。これは今から百十年余り前に、勢州（今の三重県）の志摩の港から出帆した船が暴風に遭つたもので、このことは『三国通覧』という本にもくわしく書いてある。

この後、三十日余りもこの島を旅したが、これによつてもこの島の広いことがわかる。この辺にはアザラシ、アシカが大変多く、海岸近くの岩はみな切り立っている。山は赤く焼けただれていて硫黄（い

おう）の匂いがし、山から流れて来る小川の水は黄色っぽく見える。

また、ここには温泉が出るが、ほかに名産というようなものはない。アイヌの住居も西側よりは少ない。

ウルップ島のいん

ウルップ（得撫）島は一名ラッコ（獺虎）島ともいわれている。ウルップというのは魚の名前で、形は鱒（マス）に似ているが肉の色は鮮やかな赤で、食べると大変美味である。

この島のシリヤという所に着いたが、ここは海苔の名産地であり、香味ともにいたつて良い。また、ウニも多くあつてラッコはこれを好んで食べる。

モシリヤから北へわずかな離れてタフケワタラという所があるが、この山は黄色っぽい。少し離れた所ではがけの上から温泉が湧き、滝になつて海に落ちている。

岩頭には硫黄が見えるが、湯にはあまり硫黄の気がない。病気の妙薬だという。

ここから北にベウワという岩島があるが、海上から数十丈（一五〇〜一八〇）も岩が切り立っていて、島にはエトピリカ・フレツ・シヤムチリなどという鳥がいる。遠くから見る風景は目を驚かすものがある。

ベウワの北にアタツトイという所があるが、ここに赤人の家が五、六軒ある。その家を見ると、地面を三尺ほど掘つて家を建て、棟まで砂を盛り上げて、まるで穴の中で生活しているようである。ここにはヲシユロコマという変わった魚がいる。所が変わると産物も違い、珍しい鳥や魚の類を多く見ることが出来る。

アタツトイの北にヲタンモイという所があり、この辺りはラッコの獵場で、ここを赤人らは改名してシャハリンと呼んでいる。近くに赤人の船の泊まる場所もあり、この

辺りでは最も良い港である。

この沢の奥に赤人の大きな船が一隻ある。十年以上も前の津波のときに打ち揚げられたものだという。大きな船なので動かさないでそのまま捨てられている。

この辺りはラッコが多く、ノビという名がついていたが、赤人らは改名してコロシンと呼んでいる。ラッコ獺では第一番の場所である。この島は産物も多いが、赤人どもは勝手気ままに振舞っている。アイヌの人たちは人がいいので、皆彼らにだまし取られてしまったのである。

ラッコの皮はわが国の名産として、長崎で唐との交易品にしているが、近ごろは赤人らがラッコを獲り、皮を赤人の国から北京へ出しているという。

（続く）



バス停「三十三間堂前」から五分程歩いたところに方広寺があります。昭和四八年に大仏殿が火災に遭い、京都大仏ともいわれた木造の大仏が焼失しました。

豊臣秀吉は晩年方広寺を創建し、東大寺のよりも大きい丈一八寸という木造の大仏を安置しましたが、その一年後、大地震で倒壊してしまいました。その後、秀頼は家康の勧めも

あつて大仏殿を再建し、大仏と梵鐘も铸造して開眼供養が行われました。



ぶらり寺のひとり旅

室 谷 忠 雄



の文字が、「家康の名を引き裂いて呪っている」と難くせをつけ、それが原因ともなつて大阪

冬・夏の陣の後、豊臣家は滅亡してしまいました。

こんなことがあり、豊臣家に同情し好意を寄せる当時の庶民

方広寺の因縁の梵鐘と鐘楼奥に見えるのが大仏殿

からは、この崇伝の世評は良くなかつたようで、こんなあだ名までつけられてしまいました。『大慈山氣根院僧上寺恵国師』(たいみきこんいんせじょうあつこし)すなわち、お前は最低の坊主だぞ、ということなのでしょうが、このような悪評は將軍の耳には届かなかつたようで、のちに崇伝は江戸に住み六五歳の生涯を全うしました。

夏の日を思い出す



竹 内 コ ト

今年は暖冬でしたが、海へ入るにはまだまだ先のようにです。春の光でさらさらしている海を眺めていると、やはり夏の海遊びのことが思い出されます。

私が子どもの頃の沢江の浜は砂浜が続ぎ、渚には流木や海藻などに混じつて、きれいな貝殻も散らばっていました。

夏の日には授業が終わるが早いか、男の子たちは「今日は泳ぐぞー」と叫ぶようにして、一

直線に走り出します。すると仲間の方はタダタアツ——と後に続いて浜に向かいます。

先に行った者は、身支度するやいなやいきなり海に入り沖へ向かつて泳ぎ出しています。

やがて女の子たちも来て泳ぎ始めます。

「コツちゃん、泳ぐベエ」

と、友達が声をかけてくれますが私はカナヅチです。波打ち際に腹ばいになつて両手をつき、

足をばたばたさせながら前に進むだけです。チヨちゃんは泳ぎが得意で、自分の背丈の届かない辺りまで行くと、自由に泳いでいます。とても泳ぎが上手で、そんなときの彼女は生き生きとしていました。

泳いでいた男の子が、

「モゾクがあるぞー、採つていつかあ」

と叫びます。すると岸にいた仲間が一人が、ひものついた小さい樽を持って泳いで行きます。

沢江の浜は遅くまで太陽が落ちません。実に楽しい夏の日が午後です。みんな元気な太陽の子たちでした。

方広寺は焼失しましたがその梵鐘は今も残っていて、木造の盧舎那仏(ろしゃなぶつ)が本尊として安置されています。



短歌

吉平町岬短歌会

杖つきて一段いちだん両足を揃えてはのぼりゆくもどかしさ

竹内 コト

遠き日の子らを寝かせし子守唄今抱く曾孫に歌ひて居りぬ

池田 テル

伸び立ちし公園の木々を窓に見てわが住む家に心安らぐ

榊 佳代

長電話の同じ話にもうなづきて終りし時に眩暈おぼゆる

奥山 きよみ

波の上を群れとぶ鷗にもりーダーゐて一羽の後に向きを変へ

堀 典子

ゆく
それぞれの生き方話し昼餉とる年齢の差忘れひととき過ぐす

田中 香苗

融けてゆく雪をいたわる如く吹く夕べの風のやわらかにして

山口 スエ

おだやかに広がる石狩の海のかふ雪を頂く増毛連山

鈴木 時子

赤松の枝を支へし吊縄の少しのびきて春の日に揺る

丹後 初江

雪の上に影置く桜の枝々に冬芽は育つ光を浴びて

東 美知

俳句

吉平ホトトギス会

五時を告ぐ校舎のチャイム日脚伸ぶ 斉藤波留

墨の香や手習いの子等卒業す 山口悦子

放たれし稚魚追う海猫の見いかくれ 越野敏雄

春暁や認^{したた}める句の生れけり 大和田絵伊

折帰す野焼の煙春の昏 福井幸平

果樹園の煙り真横に春の昏 関口勝志

待春の病の友の見舞かな よしざきり

春一番古平港を荒らしゆく 仲谷比呂古

橋たもと溺れてをりし猫柳 室谷弘子

あさづきの心もとなき河川敷 泉 清三

編集後記

▽陽気に誘われてか、桜もパツと咲き揃いましたがこの分だと散り際もまたパツと……
▽増ページすると好評でしたので、こちらで12ページで。
▽次号から『町の人に聞く吉平のむかし話』を載せます。まず銀座町内・木村シゲさん(87歳)からご紹介をいたします。
▽二日はお茶の好きな人には待ち遠しい八十八夜です。

新しく **古平町史年表** を連載すること
にしました。古平の町の起こりから年代
順に主な出来事を挙げ、絵や写真をまじ
えて楽しめるものにしていきたいと考え
ております。
また、それらの中での詳しいことは
今まで通り【年表で読む古平の歴史】
で継続していきます。

古平町史年表 <1>

813年前 = 文治元年・1189

平泉の藤原泰衡が源頼朝に討ち滅ぼされたとき、その残党が蝦夷に逃れ、東は鶴川から西は余市に至る各地に住み着いた。このことから後に義経・弁慶の伝説が後志・日高地方の沿岸に多く生まれた。

412年前 = 天正18年・1590

後に古平場所を開いた初代岡田弥三右衛門が、近江八幡（滋賀県）を出立して東北へ行商の旅に出る。このころからすでに近江商人が松前に来ていた。

396年前 = 慶長11年・1606

松前藩は西蝦夷地を分割し、俸禄として藩士に場所を貸し与えたが、古平場所は当時、誰の場所であったかは不明である。

333年前 = 寛文9年・1669

シャクシャインを総大将にして、交易に不満をもつアイヌが蜂起し、松前藩の軍勢は余市・古平にまで進んで来た。記録では古平で一八人、余市で四三人が殺されたという。

302年前 = 元禄13年・1700

松前藩が幕府に出した記録の中に「ふるひら、ざままき」とあるが「ざままき」というのは沖町のことと、当時、すでに漁場であったことがわかる。

四代目岡田弥三右衛門玄正が、フルヒラ場所と合わせてオタルナイ場所も請け負う。

296年前 = 宝永3年・1706

北海道漁業史には「石狩・厚田・浜益・古平・美国・積丹各漁場は宝永三年はじめて請負人あり」とある。

289年前 = 正徳3年・1713

五代目岡田弥三右衛門秀悦のとき、分家の岡田小八郎が松前と長崎とを往復し、長崎俵物（はらのもの）といわれるイリコ・ホシアワビ・フカヒレなどを扱っていた。



↑ 祀られている源義経の木像
シャクシャインの銅像 ←



近江八幡市に現存する
岡田家の邸宅 ↓

